

人と自然と文化にやさしい地域づくり

# 山口県教育

Education of the Yamaguchi prefecture

人間性豊かに生きる — 「人間性」を求める —

# 10

令和5年 No.1340



## ■教職大学院の取組

(院生の声)

山口大学教職大学院  
 山口市立柚野木小学校  
 県立下関総合支援学校  
 県立美祢青嶺高等学校  
 教職大学院

専攻長 佐々木 司  
 校長 重永美津子  
 教諭 吉田奈々子  
 教諭 平田 悦也  
 院生 村田 蒼也

## ■新支部長の紹介

岩国支部  
 下松支部  
 阿東支部  
 山陽小野田支部  
 大津支部

支部長 村川 直樹  
 支部長 相本 尚志  
 支部長 長安 宏  
 支部長 野村 一也  
 支部長 河本 英治

## ■乳幼児期の保育・教育

社会福祉法人きずなのあ保育園  
 認定こども園 鴻城幼稚園  
 学校法人桃山学園 小松原幼稚園  
 周南市立富田東幼稚園

園長 田中 浩二  
 園長 岡本 壽之  
 園長 中野 節子  
 園長 森下 美穂

## ■私の潤い

周南新南陽支部  
 山口支部

田中 輝久  
 河津 裕志

令和4年度 第75回山口県学校美術展 推奨作品  
 「大きくなったらアイドルになりたいな!!」  
 牟礼幼稚園 年長(受賞時) 矢野 奏

## 一般財団法人 山口県教育会

〒753-0072 山口市大手町2-18 TEL 083-922-0383 FAX 083-922-5768

URL <http://www.ykyoikuk.or.jp> E-mail [ykyoikuk@ruby.ocn.ne.jp](mailto:ykyoikuk@ruby.ocn.ne.jp)

明治36年4月第1号 毎月1日発行 発行人 会長：倉増誠彦／編集長：重枝謙二



## スクーリングリーダー、ニューリーダーを育てる



山口大学教職大学院  
専攻長 佐々木 司

### 教職大学院の概要

山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻（教職大学院）は、学校現場の諸課題に関して理論的・実践的に高度な専門能力をもち、学校現場における指導的役割を担うことができる人材を養成することを目的とした専門職大学院です。「理論と実践の往還・融合」という教育方針のもと、大学院の授業での学びと学校現場での実践的な学びを効果的に結びつけながら研究を深めています。修業年限は2年です。

平成28年度に学校経営コース、教育実践開発コースで開設され、平成31年度に特別支援教育コースが加わり3コースとなりました。現在学校経営コースに15名、教育実践開発コースに19名、特別支援教育コースに3名の合計37名が学んでいます。

### (1) 学校経営コース

学校経営専門職（管理職等）や教育行政専門職、スクーリングリーダーなどを養成します。教員経験が6年以上の幼、小、中、高校の現職教員が山口県内各地から通学しています。

大学で毎日授業を受ける月と、週1日大学で学びそれ以外の日は原籍校などで学ぶ月に分かれています。

大学院では、コミュニティ・スクールの理論、学校

関係法令、学校経営などを学びます。原籍校などでは、教育委員会とも連携し、学校や地域の教育課題解決のための実践や学校実習などを行っています。

### (2) 教育実践開発コース

卓越した教育実践力、即戦力として活躍できる高度な授業実践力と展開力をもち、新しい学校づくりの担い手となり得るニューリーダーを育てます。小、中、高校の教員をめざしている学部卒の院生が中心です。週2日は、定められた学校で終日学校実習を行います。そこでは、学校の教育課程実施の状況を学んだり、実際に授業を行ったりします。それ以外の日は、大学院で、教科カリキュラム開発、学級経営、生徒指導、危機管理などの専門的な授業を受けます。

### (3) 特別支援教育コース

特別支援教育分野における今日的諸課題に関して、理論的・実践的に高度な専門能力を有し、校内や地域において指導的役割を担い得る教員を育成します。特別支援学校の現職院生と学部卒院生の双方が在籍しています。特別支援教育開発演習、ケーススタディ、教育相談、特別支援教育コーディネーターに関する内容など幅広く学ぶことができます。

### その他の学びのよさ・特徴

どの院生にも3人の指導教員が、入学前から指導を開始します。また、県、市町教育委員会、実習校の管理職等から指導を受ける機会があります。更に、同じ授業科目でも、現職院生と学部卒院生が別々の授業を行う中、同時に学び合う授業も実施しています。

1年次末には「実践研究中間発表会」、修了前には「同成果報告会」を開催し、研究成果を広げています。

その他にも、現職院生と学部卒院生が交流して学び合うペアリングの活動や「ちゃぶ台方式による協働型研修会」に参加するなど、多様な学び方ができます。



◆授業科目『学外連携・コミュニティ・スクールの理論と実践 A・B』…現職院生と学部卒院生が別々に学んだ後、互いの考えを発表し、学び合う授業

支えとなっている言葉



山口市立袖野木小学校  
校長 重永 美津子  
(学校経営コース第1期生)

教職大学院で学びを深め、ずっと私の支えとなっている言葉が、二つあります。一つは「何のために」という言葉です。「次の会で何を？」と「何を」を考えると、夢中になっているとき、ふと「一体、これは何のため？」と、私にブレーキをかけ、正しい方向に導いてくれるのがこの言葉です。「何のために」(目的)をじっくり考え、答えを出してみると、希望をもって「何を」するの「か」に向かえるような気がします。



遍会での校長の話

「何のために」、この言葉が教職大学院で呪文のように言われ続け

ていたからこそ、迷走しかけたときの一番の助けになっているのだと思います。二つめは、「理論と実践の融合」です。「このような意味(理論)を理解した上で行動(実践)していきましょう」

時々、私は意識してこのような伝え方を先生方や子どもたちに行うことがあります。それは、教職大学院の柱としてきた「理論と実践の融合」が染みついてい

るかもしれません。現場においてこそ、理論だけや実践だけの課題解決は難しいような気がします。改めて日々、「理論と実践の融合」の大切さを実感しています。

最後に、学びを深めてくださった先生方、1期生の皆さんに感謝申し上げます。

教職大学院での学び



県立下関総合支援学校  
教諭 吉田 奈々子  
(特別支援教育コース第3期生)

私が、山口大学教職大学院特別支援教育コースへの進学を決めたのは、大学4年の時でした。理論を徹底して学びながら、学んだ理論を使って実践研究ができることに大きな魅力を感じたからです。

2年間の学校実習および実践研究を通して、特に「理論を現場でどのようにして実践するか」を学ぶことができました。「理想と現実のギャップ」という言葉があります。大学院での学びによって、「理想」を「現実」にするための考え方や具体的な方策について実践的に学び、自分の中に蓄えることができました。初任の教員として、目の前の「現実」と向き合いながらも、児童生徒の成長を促すよりよい支援のために「理想」を追い求め、奮闘する日々です。



学校実習の様子

指導がなかなかうまくいかなかったりしますが、児童生徒の行動の背景や環境側的重要因素について客観的に捉えたり、指導内容や方法が社会的に妥当であるかを問うたりすることは、大学院で理論を学んだからこそ、日々の実践の中で行っていると感じています。今後も児童生徒の将来や生活の質の向上について、周りの先生方と一緒に考えながら指導していきたいと考えています。

センス・オブ・ワンダー



県立美祿青嶺高等学校  
教諭 平田 悦也  
(学校経営コース第7期生)

昨年度より山口大学教職大学院で学んでいます。校種も教職経験年数もさまざまな現職院生や学部卒院生との学習会等では、常に新しい刺激を受け、大変貴重な学びの場となっています。



コース、校種を越えた学び

「美しいものを感じ、新しいものにふれた時の感激、思いやり、悔れみ、驚嘆や愛情などの様々な感情がひとつたびよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけ出した知識は、しっかりと身につきます」これは、アメリカの生物学者レイチェル・カーソンの著書「センス・オブ・ワンダー」の中の一節です。高校生の時に感銘を受けた本ではありますが、改めて、「センス・オブ・ワンダー」＝「神秘さや不思議さに見る感性」をもつことの大切さを再認識しています。

現在「学科間連携による地域連携・協働活動の充実に向けた取組」についての研究を行っており、引き続き、自身の研究にしっかりと取り組み、その成果を今後の教育活動に活かしていきたいと思

理論と実践の往還を力に



教職大学院  
院生 村田 蒼也  
(教育実践開発コース第7期生)

現在、私は教職大学院に通っており、2年目になります。学校実習校は山口市立小郡中学校です。

学校実習では、1年を通じて実習に行けることから、さまざまな学校行事にも参加させて頂いています。行事の前や行事における先生方の動きを身近で感じ、とても勉強になっています。また、生徒との関係が深まる中で授業を実施することができています。そのため、個々の生徒理解がより深くなり、授業の構想に役立てる工夫が繋がっています。

大学院の講義では、学部在籍していた時よりも専門的で実践的な深い学びを得ることができています。とくに学びが深まった授業は、「学外連携・コミュニティ・スクールの理論と実践」です。山口県の地域連携教育の実情を知り、学校運営協議会について学んだ後、実際に実習校の学校運営協議会に参加することができました。このように、学びをすぐに学校実習で確かめることができるなど理論と実践の往還を体験しています。

4月からは、山口県での憧れの教員生活がスタートします。教職大学院や小郡中での学びを活かし、「全ては生徒のために」という言葉を胸に、日々精進していきます。



学校実習での数学科の授業

## 小さな一歩



岩国支部

支部長 村川 直樹

退職後3年目となる本年度も、初任者とともに授業づくりや学級づくりについて学び合い、子どもの成長に寄り添う仕事をいただいている。

そんな中、縁あって教育会の支部活動に関わることとなった。さまざまな文書にふれたり、役員の方々のお話を聞いたりしてあらためて感じるのは、諸先輩方の弛まぬ努力や現任教員の協力が教育会を支えてくださったということである。本当にありがたい。

教育会の理念に基づく数々の取組が、学校の活性化や教育支援にもつながっている。これまでの土台を生かしつつ、少しでも充実させることが私の役割の一つだと受け止めている。

さて、現在の学校教育に目を向けると「教員の時間外勤務時間の縮減の停滞」や「教職員の人手不足」など深刻な課題に直面していると言わざるを得ない。

多くの力を結集して教育の質を向上させようと努めている最中に、量的な面での課題が解消されず、現場の教員の負担によって何とかカバーされているという状況が実際にある。

教育会は、多くの教員経験者で組織されているメリットを生かし、まずは学校教育を身近で支えることのできる団体でありたい。

このたび、長期休業等を利用して学校を訪ね、校長先生と学校の現状や課題等について情報交換する取組を始めた。密かなねらいは、現職教員と退職管理職の会員確保であるが、まずは顔をつなぎ、教育会の意義にご理解をいただくことが大切である。

人の心を動かすのは、熱意と継続的な関わりであること信じて、ゆっくり歩を進めていきたい。



長期休業を使った学校への訪問

## 支部活動 今、出来ることは



下松支部

支部長 相本 尚志

退職を退き20年、80歳になる私が、令和5年度の支部長を引き受けたものの、何をどのように進めればいいのか思案しています。本来なら全ての役割を離れ自然に親しむ生活を送りたいところですが事務局長をしていた、この3年間は会議や行事は新型コロナウイルス感染症対策で中止され、学校との対面での会員募集も出来ず会員数も減少傾向にあります。

また、60代の会員は全員が何らかの仕事に従事し、さらに皆さんが退職校長園長会や退公連の役員をしていますので役員調整も大変で掛け持ち状態です。今後はもっと連携していく必要性を感じています。従って、現状ではまとまった支部活動はできていません。個人がそれぞれ子育て支援、放課後

子ども教室、くだまつ未来塾での中学生の学習支援等、地域・学校等で単独で活動しています。支部の方針として、昨年度に続き現職教員研修の研修助成に力を入れていきたいと思



放課後子ども教室の様子

います。昨年度は小学校一件のみ、今年度は幼稚園、小学校合わせて三件の申請がありました。私の今の関心事は小学生の時に、父に連れられて古墳の発掘調査に行ったことがあります。最近、中学生の頃遊んでいた見晴らしの良い小高い丘の造成で、天王森古墳の周辺から太刀形埴輪、巫女や家形埴輪が出土し約1500年前の姿が復元され脚光を浴びていることです。学術的にも価値の高い文化遺産です。これを機に郷土の歴史や文化にもっと目を向けていきたいと思

います。支部研修としても、下松市の歴史的な背景を学び、郷土への愛着を醸成する一助となればと思います。

## ゆるくゆるく



阿東支部

支部長 長安 宏

阿東支部は、会員数約70人の小さな所帯です。小学校が3校、中学校の教育会会員は、41人です。入会率89%です。この教職員の加入率の高さに感謝しています。支部として特段の活動をしているわけではありません。ただ、教育会の会員が、学校運営協議会やコミュニティ・スクール連絡協議会、青少年健全育成市民会議、ボランティア等で学校と関わることが多く、学校現場と近い関係にあります。現場の先生方には、顔の見える教育会阿東支部と言えるかもしれません。

昨年は、防府地区教育振興フォーラムを阿東支部の引き受けて開催しました。当日のお世話係や参加者として、9人の管理職以外の教職員の参加がありました。現場の先生方に阿東支部を支えてもらっています。

諸君で学校を訪問することがありますが、私は、忙しい校長先生や先生方の時間を取らないよう、玄関先で要件を済ませる事を心がけています。必要であれば学校から声がかかるであろうし、声がかれば、時間が許す限り手伝いも参観もします。「ゆるく、ゆるく」つながり、離れず、必要なら語らい手を取り合う、そんな、阿東支部でありたいと思っています。

頭の片隅に小さな萌芽があります。それは、山口線の利用促進です。高校生やお年寄りの移動手段として、山口線を守ることは重要なことです。阿東地域の大きな課題となっています。本年度の阿東支部役員会(総会)でこの課題を投げかけました。阿東支部として出来ることはないか、模索

していききたいと思います。



山口線を走るS.Lやまぐち号

思いをつなぐ



山陽小野田支部  
支部長 野村 一也

令和2年3月、新型コロナウイルス感染症蔓延防止対策のため、全国の学校が休校となりました。同月31日、長年勤務してきた学校現場で定年退職を迎えました。フェードアウトの感はありませんでした。その後2年間は不登校児童生徒の指導をしていましたが、昨年度より、地域交流センターで勤務することとなり、今日に至っております。

教育会山陽小野田支部の理事会で、前竹島支部長より、突然、私に「支部長を受けてもらえないだろうか」という話がありました。寝耳に水の出来事で、始めは難色を示していましたが、長きにわたって教育会の支部長としてご尽力された大先輩のお願いを、断ることは大変申し訳ないという思いからお引き受けすることとなりました。

前竹島支部長は、会の始まりか終わりに、挨拶を兼ねて必ずマジックを披露されました。ちよびり怪しいマジックは、会員の笑いを誘い、会場全体を和ませてくれました。私は、竹島先生の教育に対する思いに、笑顔、楽しさ、夢、希望…といったものを感じています。このことは、私自身とても共感できる場所であり、支部長を引き受けた要因の一つとなったのかもしれないと思います。前竹島支部長のこの思いは繋いでいきたいと思っています。

複雑で予測困難な時代です。教育の世界では、教員離れが話題となっています。教育とは「人が人に対してなす行為であり、人の心が人の心に働きかける行為」だと思っています。AIがどれだけ進化し、街中でロボットが闊歩するようになって、教育という崇高な営みは、決して失われることはないと思っています。児童生徒、教職員、その他教育に携わるすべての人が、笑顔、楽しさ、夢、希望を少しでも感じられるような活動をめざして努力したいと思っています。



親子木工教室

地域づくりは人づくり



大津支部  
支部長 河本 英治

退職をして、あつという間に6年目を迎えました。退職後は米作りをのんびりやりたいと思っていたのですが、退職後すぐに地元の公民館に週3日務めることになりました。以前から退職後は地域に何か自分でできる範囲の恩返しができればと思っていましたので、良いご縁をいただいたと感謝しています。また、今年度より大津支部の支部長を引き受けることになり、お役にたてるかわかりませんが、その重責を果たしていきたいと思っています。

さて、公民館では地域学校協働活動推進員として、学校と地域とのパイプ役を務めています。三隅地区は二つの小学校と一つの中学校があり、どの小中学校も「ふるさと三隅」を愛する気持ちを育てるために、子どもたちと地域との繋がりをとても大切に考えています。

令和4年より、「誰もに住みたくなくなる三隅」をめざして、「子ども夢プラン」の作成に取り組んでいます。児童生徒の合同の熟議を通して、三隅地区の課題について考え、三隅地区をどんなまちにしたいのか、その取組の具現化に向けて、現在準備を進めているところです。地域学校協働活動の目的の一つは、地域全体で未来を担う子どもたちの学びや成長を支えることにあります。三隅地区は昔から「地域づくりは、人づくり」を合言葉に生涯学習に力を入れてきた地区でもあります。しかしながら、今日、少子化による人口減少、急速な高齢化の大きな波が三隅地区でも例外なく打ち寄せています。また、若者の地元離れが進み、地域の元気がますますなくなっていくように思います。

未来を担う子どもたちのために少しでも地域が元気になるような活動を微力ながら進めていきたいと思っています。



子ども夢プラン作成のための児童生徒による熟議の様子

第74回日本連合教育会研究大会  
山口大会・第50回山口県教育  
民大会へのご協力ありがとうございました

去る8月17日、18日に行いました山口大会は、開催に向けての準備や調整、当日の運営など、県内各支部の皆様にご協力いただき無事終えることができました。感謝申し上げます。山口、吉敷、阿東各支部の皆様には事前の打ち合わせ会への出席も含め、猛暑の中での誘導など、また、山口市内の先生方には会の運営・記録にもご協力いただきました。重ねてお礼申し上げます。次号11・12月合併号にて大会の報告をさせていただきますが、取り急ぎ誌面を借りてお礼申し上げます。ありがとうございます。

なお、合併号の発送は11月1日を予定しております。よろしくお願いたします。



開会式の様子



打ち合わせ会の様子

終身会員の紹介

椋田 真史 様

(下関 王司小・長府小 学校医)  
うめだ小児科医院

## 子どもの成長を育み、小学校へつなげる



社会福祉法人きずな のあ保育園  
園長 田中 浩二

のあ保育園では、「勇気・創造・思いやり」を保育の方針に掲げ、住宅地でありながらも自然豊かな環境の下で子どもたちが感受性豊かに日々過ごしています。年間を通して、草花や木の実などを使った遊び、昆虫や野菜などの動植物の飼育・栽培を積極的に保育に取り入れた活動を展開しています。また、山口県の童謡詩人、金子みすゞの詩に触れ、親しむことで優しい心や感性を育んでいます。

もう一つ、保育の中で意識していることの一つとして、小学校への接続があります。保育所やこども園、幼稚園などすべての就学前施設について

言えることです。子どもたちはいずれ私たちの手を離れ、小学校へと進んでいきます。生活習慣や友達との関わりなど、小学校での生活を見据え、自分らしさを発揮できるようにするとともに、少しでも小学校生活を楽しく過ごせることをめざしています。

小学校との接続については、下関市内の公立保育所・認定こども園が所属する下関市保育連盟でも、長期にわたって研修会や調査研究を実施するなど、とくに力を注いでいる取組です。現在では、「就学前施設における遊びが子どもの育ちに及ぼす

影響に関する調査研究—子どもの育ち・学びの連続性を支えるカリキュラムの作成に向けて—」と題した調査研究に取り組んでいます。これは、小学校との接続を行う際、子どもたちの姿がどのような遊びや生活場面、保育者の関わりによって育まれたのかを言語化できるようにすることを大きな目的としています。調査研究としてはまだ緒に就いたばかりですが、途中経過を研修会などで報告するとともに、下関市私立保育連盟ホームページでも発信しています。機会があればぜひご覧ください。



山口県保育大会の様子

## 日々の育ちを実感



認定こども園 鴻城幼稚園  
園長 岡本 壽之

本園は、昨年度から認定こども園に移行し、保育棟が完成した本年度から、1歳児、2歳児のクラスを開級しました。家庭で生活してきた子どもたちにとっては、保育所という未知の社会での生活は不安いっぱいですが、朝の別れは、新しく入園した子どもにとっても、そして親にとっても最初の試練です。4月当初は、泣き声が途切れることがなく、保育室はとても賑やかでした。しかし、入園して2〜3カ月経つと、1歳児クラスでは、全員が集まって朝の会をしたり、食事前に自席にちゃんと座ったり、自分の布団を見つけて午睡をしたり、ズボンを穿いたりできるようになり、ズボンを穿いたりできるようになりました。

「友達の言動をまねて学ぶ」集団力の威力を実感しました。そして、最近では、次第に喃語から単語そして文章の会話となり、意思疎通も図られるようになりました。また、ハイハイ歩きだった子どもも立って散歩できるようになりました。日々の著しい成長に目を見張るものがあります。

さて、園庭や保育室の遊びに目を向けると、友達と遊んだり、自分の好きな遊び道具を見つけて遊びに没頭したりしている子どもの姿を見かけます。その遊びを見ていると、その子の思いや意図を感じます。幼稚園教育要領では、遊びを通しての総合的な指導を行う中で、「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を一体的に育んでいく重要性が述べられています。何気なく遊んでいる子どもたちですが、そこには学びや育ちがあります。

5年後の卒園式、そして10年後、20年後にどのような姿に成長しているかとても楽しみである一方、子どもの成長に関わる責任感を強く感じるところです。日々の教育・保育活動を大切に、子どもたちを見守っていきたいと思います。



読み聞かせの様子

## 子ども達の笑顔と共に



学校法人桃山学園 小松原幼稚園  
園長 中野 節子

本園は昭和23年に日本キリスト教団宇部教会付設小松原幼稚園として開設しました。令和8年には創立80周年をむかえます。祖父から母へそして現在娘の私が引き継いでおります。嬉しいことに、2代目、3代目の入園者も増え、たくさんの方々のお支えに日々感謝しながら、先代が幼稚園を立ち上げた時の教育信念を大切に守って今日に至ります。

幼稚園はあたたかい家庭から初めて一步を踏み出した幼い子どもたちの集団生活の場として、まず安心して過ごせなければなりません。登園の際に両手を広げて「待ってたよ!!」としっかり受けとめます。気持ちのいいご挨拶は基本です。一人ひとりお互いに存在を認め合う嬉しい会話が弾みます。年長さんはお先にどうぞと常に小さい組の人をいたわり、年少さんは大きい組のお兄ちゃんたちにいつも憧れています。全職員が、全園児のことをしっかり把握して「常にチーム保育」が合言葉です。子どもたちは遊びの天才です。毎日、子どもの視線でないと見つからないたくさんの事を大人の私たちに教えてくれます。そして、何か問題に直面した時は、とくに年長クラスでは「さあ困った!」を考えるチャンスに変えて「みんなはどうしたらいいと思う?」と話し合いがなされます。子どもたちの発案に驚かされる事もしばしばあり、その度に職員間で成長を喜び合っています。

幼児期は、机上のお勉強以前にしておくべき事が山盛りです。根っこ部分の育ちこそ、将来に大きく関わってくることを確信しています。そこは保護者にも常々発信し、連携をはかっております。

そして、私が今こそ幼い子どもたちに伝えたい事は、日本の美しい文化と季節の食育です。春、美しく咲き誇った園庭の桜が葉桜になったら、年長さんが収穫して塩漬けにして、3月のお雛祭りのお祝いの際に桜餅にしてみんなでいただきます。ツバメが頭上を飛び交う季節にはテラスで、グリーンピースの皮剥き、ふきの筋とり、梅もぎと梅仕事(梅ジュースは、園児、保護者、来客に振る舞います)、夏野菜、お芋の苗ふせ、秋には、芋掘り(芋づるも頂きます)、栗拾い、りんご狩り(りんごのお菓子もたくさん作ります)、幼稚園では、「楽しいね!!美味しいね!!嬉しいね!!」をいっぱい繰り返して、心の安定をめざします。

キラキラと輝く瞳、生き生きと語りかけてくれるかわいらしい子どもたちに、明るく輝かしい未来が待っていますように切に祈ります。



楽しい秋高台での合宿

## 異年齢での育ち合いの姿を大切に见守る



周南市立富田東幼稚園  
園長 森下 美穂

幼児期の教育は、幼児一人ひとりが自分を取り巻くさまざまな人・物・出来事・自然などに主体的に関わりながら遊びや生活を通して直接的な体験を重ね、さまざまな思いや願いを感じ考えながら学ぶ「環境による教育」が基本となっています。

本園は二年保育の園で、園児数が少なく核家族化が進んでいます。そのため、家族以外の人との関わりが少なく、年度当初は、年少児との接し方に戸惑う年長児の緊張している様子が見られました。そこでこの姿を全職員で共有し、本園の特徴である二年保育のよさを生かした縦の繋がりを大切に、幼児が人との関わりの中で主体的に生き生きと遊びや生活を楽しめるよう保育に取り組んでいくことにしました。

今年も6月中頃から、石鹸をおろし器で削って作るクリーム作りが始まり、教師も傍で一緒にクリームを作りながら幼児の様子を見守っていただきました。この頃には園生活の中で、互いの保育室を行き来しながら一緒に遊ぶ様子が見られるようになり、年長児の緊張した表情もほとんど見られなくなりました。年長児の遊びに興味をもった年少児がクリーム作りを始めましたが、何度挑戦しても

年長児のような「ふわふわもちりクリーム」を作ることが難しく年少児は困っていました。その様子を傍で見ていた年長児が、年少児の思いを受け止め、自分が作っていたクリーム作りの手を止めて一緒に考えたりヒントになる方法を知らせたりして

いました。年少児は年長児が教えてくれたことが嬉しかったようで、諦めずに何日も繰り返し挑戦し、イメージするクリームを作ることができました。出来上がったクリームに大満足した年少児にとって、この体験は大きな自信となり、自分が年長児に教えてもらったことを、友達に伝える様子も見られるようになりました。年長児も相手の思いに気付いたり自ら教えたりすることができるようになり、自信をもって積極的に年少児と関われるようになってきました。

今後も、自然な異年齢での関わりが受け継がれていくような二年保育のよさを生かした保育を大切にしていきたいと思っています。



石けんクリーム

こーやって作ったらしいんだよ。

今、私にできること



周南新南陽支部  
田中 輝久

コロナ禍の学校を退職して2年目、ようやく本来の姿に戻りつつある学校現場で、再任用ハーフで初任研を担当しています。

教職の最後を、「このような状況下で終わりたい」という思いと、自身が学校現場を離れていた期間が長かったため「もう少し現場の空気が吸いたい」という思いが重なり、迷わず選択しました。

若い先生方との日々の関わりは、とても刺激的で、自分の若いころを思い出しながら、親のような思いで見守る自分があります。

また、約20年遠ざかっていた部活動の指導も、フルタイムで関わらせてもらっています。部活動に明け暮れた若い時代の指導を猛省しながらも、生徒とともに汗をかき、心地良い日々を過ごしています。

さて、学校教育は今、大きな転換期にあり、新時代へと加速しています。かつて、小学校6年生に、「中学生になって頑張りたいことや楽しみにしていることは何か」と尋ねると、返ってきた言葉の多くに、「英語」と「部活動」がありました。しかし、英語はすでに小学校で始まり、部活動は今後、地域移行されていきます。こうなると、小学生が進学する中学校での楽しみは、



試合中の一コマ

いったい何なのでしょか。中学校に夢や希望が持てなければ、楽しい中学校生活は期待できません。そんな中で、「今、私にできることは何か」を考えたときに、その一つとして、教育的意義も大きかった部活動が、学校からスムーズに地域移行できるためのつなぎ役となり、学校から部活動がなくなっても、生徒が好きな運動と向き合えるようにすることが、今、私にできることであり責任を果たすことだと考えました。

いづれにせよ、これからの学校は、自校ならではの特色をもった、魅力あふれる学校を創っていくことが、今以上に求められるのでしょか。

子どもたちの笑顔に元気をもらいながら…



山口支部  
河津 裕志

令和4年3月末の定年退職後、縁あって、園長として勤務させていただくこととなった山口市立山口みなみこども園。本園は、山口市南部の幼稚園を統合し、市内においては公立で初めての認定こども園として、令和4年度に開園。その開園初年度から勤務する機会をいただいたことは大変光栄に感じるものの、これまでとは違った職場環境や慣れない業務に、2年目を迎えた現在でも戸惑うことの多い日々です。

園では、「子どもが生き生きと輝くこども園」をめざすこども園の姿と設定し、地域から愛され、地域に貢献できる子ども育成に努めています。園には幅広い年齢の子どもたちが在籍することから、いろいろな年齢の友達とかわる場面が多くあります。そのことにより、低年齢の子どもに対する思いやりが育ち、低年齢の子どもは大きい子どもへあこがれの気持ちを抱くなど、子どもたちが健やかに育つ環境にあります。

幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、「生きる力」の基礎を学ぶ時期であると言われることから、保護者や地域に日々の保育・教育の様子はもちろんのこと、幼児教育の大切さについて情報発信することに力を入れています。さらには、学校現



園外保育（かっちゃんやまでの一場面から）

場に勤務した経験を生かし、小学校での学習や生活を踏まえた幼児教育の在り方についても、積極的に提言等をするようにも心がけています。

この6月には、全国国公立幼稚園・こども園長会総会・研究大会が山口市を会場に、4年ぶりに対面形式で開催されました。全国の園長先生方の幼児教育への熱い思いを直接肌で感じ、新たな学びがたくさんあったことに加え、この職に就き、感じていたことや思っていたことに自信を深める機会ともなりました。まだまだ新米の自分ではありますが、子どもたちの笑顔や澄んだまなざしに元気をもらいながら、今後も与えられた職責を果たしていきたいと思っています。